

福井神社の内部を見学する県コンクリート診断士会のメンバー＝福井市大手3丁目の同神社



直雄が、助教時代設計を担当した会心作だった。同時期の建築に、五十嵐が東大時代に同期だった丹下健三の香川県庁（58年）がある。伝統建築の垂木をコンクリートに置き換えた日本的な表現は、その後の公共建築の方向性を定めたと言われるが、五十嵐は建築学的に合理的な形で構造を抽象化し、日本の表現の本質をえぐり出した。

総鉄筋コンクリートで伝統意匠の表現を試みた名建築として知られる福井神社（1957年）について、建築や構造計算のプロが理解を深める研修会が23日、福井市大手3丁目の同神社などであった。同神社の学術調査を進める日本建築学会福井支所の市川秀和・福井工大建築土木工学科教授が、福井の戦後復興の象徴として造られた同神社の革新的な設計思想を説き、保存の必要性を訴えた。

県コンクリート診断士会の研修会として開かれ約50人が参加。県教育センターでの座学の後、神社を見学した。松平春嶽をまつる同神社は、戦争で焼失した総ひのき造りに代わって、福井大が再建。福井市体育館や福井大仏などの戦後建築を手がけ、後に初の県人学長となる五十嵐

象徴的なのは、左右からせり出す棟持ち柱がコンクリートの棟木を支える拝殿と本殿の構造。最も根源的な神社建築様式の神明造をコンクリートで再構築したもので、柱のない大空間を実現するとともに、貫を排除したミニマルな大鳥居とのデザインの連続性をもたらしている。市川教授はドイツの名建築家ミース・ファン・デル・ローエの代表作「クラウンホール」（45年）との構造的な共通点を指摘し、福井神社を知ったミース研究の第一人者、佐野潤一撰南大名誉教授が「日本にミースがいた」と驚愕したエピソードを披露。「これだけの思想を持った建築家の作品を福井の地に持っていることは幸せなこと」と訴えた。

この後、福井神社へ移動して社殿の内部などを見学。同診断士会の石川裕夏会長は「コンクリートも施工も質が高く、60年前のものとは思えないくらい状態がいい」と話していた。

（岩城一彦）

福井神社の設計 革新的 プロが研修